

# 幼児における感情の比喩についての理解と表現： 比喩文の選択と描画による検討

2050828

竹内 貴久

## 1. はじめに

人間が、ものごとを相手に伝える際に有効となるのが比喩である。比喩とは、何かを別の何かで表現することであり、自分の持っているイメージを相手に分かり易く伝えることのできるコミュニケーション方法のひとつである。

本研究では、このような比喩の中でも、喜び・悲しみ・怒りといった感情を表現した比喩について、幼児のもつ理解能力と表現能力に注目して検討することを目的とする。

以上のような目的に沿って研究を行うために、本研究では2種類の実験を行う。実験1で比喩の理解能力を、実験2で比喩の表現能力を検討する。

## 2. 実験1「比喩文による検討」

### 被験児

被験児は、某市内にある保育園の年少児6名・年中児6名・年長児6名（それぞれ男児3名、女児3名ずつ）の合計18名であった。

### 実験計画

実験は、年齢3（4,5,6歳）を被験者間要因とし、感情の種類3（喜び・悲しみ・怒り）を被験者内要因とした2要因混合計画で実施した。

### 材料

紙芝居3種類（結末の主人公の表情が、喜・悲・怒のもの）、表情カード9枚（紙芝居の主人公の喜・悲・怒の表情を描いたもの）、比喩文カード18枚（各感情6文）と「？」文字カード、台紙6枚（比喩文カードを貼るためのものが、各感情2枚）、絵カード18枚（比喩文カードの意味を絵で表したもの）と「？」絵カード、記録用紙。

### 手続き

被験児は1人ずつ、保育士1人と一緒に保育園の一室に来てもらった。そして、紙芝居クイズを行った。これは、被験児に紙芝居を読んだ後、結末における主人公の気持ちを表情カードで当てさせるものであった。紙芝居クイズ後、台紙1枚と、3枚の比喩文カード（喜・悲・怒を各1文）と「？」文字カード1枚、絵カード3枚と「？」絵カード

1枚を提示した。比喩文カードの意味を表しているものが絵カードだと教示した。そして、「今のその主人公の気持ちと同じ気持ちのものはどれだと思う？」と尋ね、表情カードが表す感情と感情表現が一致している比喩文を選ばせ、台紙に貼らせた。「？」文字カードは答えがわからない場合や、求める答えが選択肢の中にないと思われる場合に選ぶように教示した。これらの流れにより、1人の被験児につき、3つの紙芝居を読み聞かせ、6問の比喩文を選ばせた。なお、紙芝居の種類と比喩文の提示は、ランダムで行った。ただし、1問で提示する3つの比喩文のセットは常に同じである。全部で6セットあるが、セットの出し方はランダムである。

### 結果と考察

実験の結果、紙芝居クイズにおいて、こちらの想定した感情とは異なる感情を回答した被験児がいた。しかし、その場合、その被験児を不適切だとして分析から除外しなかった。選択した比喩文における正誤の基準は、成人の感情判断への一致、不一致を基準とし、成人の感情判断と一致した場合を正答、不一致の場合を誤答とした。

図1は、各学年における平均正答率の推移を感情別に示したものである。1要因の被験者間の分散分析を行った結果、喜びの感情は、年長が年少よりも有意に高かった ( $F(2,13) = 5.50, p < .05$ )。悲しみの感情は、年長が年少よりも有意に高く ( $F(2,14) = 4.93, p < .05$ )、年長が年中よりも有意に高かった ( $F(2,14) = 4.93, p < .05$ )。怒りの感情は、年齢間において有意のものはなかった。

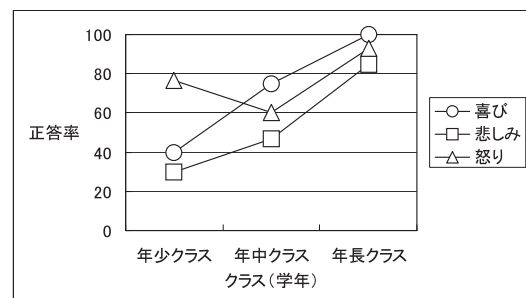


図1: 感情ごとにおける平均正答率

喜びの比喩については、正答率が、加齢とともに上がっていった。また、年長において、3つの感情の中で最も正答率が高かった。これらは、喜びが1つしかないポジティブな感情の比喩表現のため、2つあるネガティブな感情の比喩表現よりも選択の際に迷いにくいので、正答率が悲しみや怒りよりも高くなりやすいためと考えられる。

悲しみの比喩については、年少一年中間ではあまり伸びず、年中一年長間において急激に伸びていた。また、年少・年中・年長のどの学年においても、最も正答率が低かった。これらは、悲しみの比喩に対する理解が、相対的にやや遅れて成長することを示唆している。

怒りの比喩については、年少における怒りの正答率の高さから、怒りを表現した比喩に対しては、早期から高い理解力を持つ傾向があると考えられる。年少一年中間で成長していなかったのは、この時期に悲しみの比喩を理解できるようになってくることから、ネガティブの感情同士の区別がつかず混合して捉えるために生じると推測できる。

### 3. 実験2「描画による検討」

#### 被験児

被験者は、某市内にある保育園の年少児4名（男児2名，女児2名），年中児2名（男児1名，女児1名），年長児2名（男児1名，女児1名）の合計8名であった。

#### 材料

紙芝居3種類（実験1と同じもの），画用紙，クレヨン，絵カード1枚（風景の絵），記録用紙。

#### 手続き

被験児は1人ずつ，保育士1人と一緒に保育園の一室に来てもらった。そして，実験1と同じく紙芝居クイズを行った。紙芝居クイズ後，風景の絵を見せ，「○○（紙芝居の主人公）の気持ちをこの絵のようにお外の天気で表してみよう」と指示した。その後，被験児にクレヨンと画用紙を渡して描かせた。さらに，実験内容の主旨を理解した被験児に対しては，紙芝居クイズで回答した感情以外の感情についても表現させた。

#### 結果と考察

被験児が描いた絵を図2に示した。

年少は，各感情を色で表現していた（図2(a)）。つまり，色といった知覚的な類似性に基づいて，感情を喩えて表現できていた。年中と年長は，年少

とは違い，色で表現するよりも「雷」や「雨」といった天気で表現していた（図2(b)~図2(d)）。

被験児に課題内容を指示した際の反応において，年中や年長の場合，「晴れ・雨・雷」などの具体的な天気名を答え，それから絵を描き始めることが多かった。年少の場合，何も答えずに少し考えてから絵を描き始めた。その後，こちらが被験児に質問することで描画内容を確認した。尋ねて間もなく回答が返ってくるということから，成長していくにつれ，各感情と天気のイメージが合致していくと考えられる。



(a) 被験児2: (喜・悲・怒)



(b) 被験児5: (喜)



(c) 被験児5: (悲)



(d) 被験児5: (怒)

図2: 被験児の描画

### 4. おわりに

本研究では，感情を表現した比喩に対し，幼児期の子どものもつ生成能力と理解能力について調査・検討した。

本研究における今後の課題を以下に記述する。実験1において，悲しみ・怒りといった2つあるネガティブな感情の比喩に対して，ポジティブな感情の比喩が喜び1つだけだったので，「愛」や「安心」といった他のポジティブな感情の比喩を加えて比較・検討したい。また，実験2に関しては，天気以外のモチーフで出題してみるべきだろう。もしかしたら，知覚的な類似性に基づく比喩以外にも表現できるのではないだろうか。